

マルコによる福音書 9 章 14 節～29 節

2016 年 12 月 23 日

古本 靖久

1、聖歌 470 番 「人の目には すべなしと」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 78 ページ）

4、テキストの位置

前回、イエス様と三人の弟子たちは山に登りました。そして彼らはイエス様がモーセやエリヤと語り合い、そして変容するのを目撃しました。

しかし今回、イエス様はその栄光のうちにとどまらずに、山を下ります。その視線の先には十字架があり、そして飼い主のいない羊のような群衆がおりました。

受難への道	8:27-30	イエスとは何者か
	8:31-33	第一回受難予告
	8:34-9:1	弟子であることとは
	9:2-13	イエスの栄光
	9:14-29	信仰と祈り
	9:30-32	第二回受難予告

5、節ごとに

◆信仰と祈り

9:14 （そして）一同がほかの弟子たちのところに来てみると、彼らは大勢の群衆に取り囲まれて、律法学者たちと（弟子たちが）議論していた。

イエス様と三人の弟子（ペトロ、ヤコブ、ヨハネ）が山から下りてくると、残りの九人の弟子たちがそこにはいました。彼らは群衆に取り囲まれながら、律法学者と議論をしているところでした。

この書き方を見る限り、あまりよい状況であったとは言えないようです。イエス様がいない中で弟子たちが必死に語っている姿は、福音書が書かれた時代に自分たちを迫害する人たちと議論する自分たちの姿と重なっていたのかもしれませんが。

9:15 (そしてすぐに) 群衆は皆、イエス(彼)を見つけて非常に驚き、駆け寄って来て挨拶した。

群衆はなぜ、非常に驚いたのでしょうか。しばらく帰ってこないはずのイエス様がいたので、びっくりしたのでしょうか。あるいはイエス様がいないことをいいことに、イエス様を非難するようなことを言っていたのかもしれませんが。わたしたちにもそのような経験はないのでしょうか。

また山上の変容の余韻が残っていたのではないかと考える人もいます。出エジプト記にはモーセが十戒を神さまからいただいたときに、その顔が光を放っていたという記述がありました。同じようにイエス様は衣が輝いたまま、下山したのでしょうか。

9:16-17 (そして) イエス(彼)が(彼らに)、「(彼らと)何を議論しているのか」とお尋ねになると、群衆の中のある者(一人)が答えた。「先生、息子をおそば(先生のもと)に連れて参りました。この子は(口をきけなくする)霊に取りつかれて、ものが言えません(います)。

何を議論しているのかとイエス様は尋ねます。群衆の一人である父親は答える代わりに、弟子たちの前に連れて来られた一人の子どもの説明をします。

イエス様は以前にも、耳が聞こえず舌の回らない人をいやしました。そのうわさが父親の元にも届いていたのでしょうか。当時口がきけなくなることも、悪霊の仕業だと考えられていました。

9:18 霊がこの子に取りつくと、所かまわず地面に引き倒す(引き裂く)のです。すると、この子は口から泡を出し(吹き)、歯ぎしりして体をこわばらせてしまいます。(そしてわたしは)この霊を追い出してくださいるように(あなたの)お弟子たちに申しましたが、できませんでした。

この子はものが言えないだけでなく、癲癇(てんかん)のような症状も起こしていたようです。原文では「引き裂く」という動詞が使われており、身体が今にもバラバラになりかねないような悲惨な状況にあったことを示します。

しかし弟子たちは霊を追い出すことができませんでした。6章7～13節では **12人は派遣され、悪霊を追い出していたのに、なぜ今回はできなかったのでしょうか。**その理由は最後に出てきます。とにかく父親は弟子たちに失望しているようです。

9:19 イエス（彼）は（彼らに）お答えになった（て言う）。「なんと信仰のない時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共に（の元に）いられようか。いつまで、あなたがたに（を）我慢しなければならないのか（できようか）。その子をわたしのところに連れて来なさい。」

イエス様は明らかに怒っています。その怒りはイエス様にいやしを要求する父親ではなく、この時代に信仰がないことに対して向けられています。

イエス様はすでにご自身が十字架につけられることを予告されています。つまり弟子たちは自分たちの力で活動していかなければいけないはずですが、だからイエス様の助力が必要な現状に我慢ならなかったのでしょうか。

そしてイエス様は言われます。「その子をわたしのところに連れて来なさい」と。

9:20 （そして）人々は息子をイエス（彼）のところに連れて来た。（そして）霊は、イエス（彼）を見ると、すぐにその子を引きつけさせた。その子は地面に倒れ、転び回って泡を吹いた。

霊はたちまちその子に発作を起こさせます。映画などでも、力をもった人の前に出てくると、悪霊は最後の抵抗をするようです。じっとしておけば悪霊であることがバレないのに、と思うのはわたしだけでしょうか。

9:21-22 （そして）イエス（彼）は父親に、「（この子に）このようになったのは（なことが起こって）、いつごろからか（どれくらい経つのか）」とお尋ねになった。父親（彼）は言った。「幼い時からです。霊は息子を殺そう（滅ぼそう）として、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。（ですが何事か）おできになるなら、わたしどもを憐れんで（、わたしたちを）お助けください。」

17 節とは違う症状がさらに報告されます。このことから、この物語は二つの伝承が合わさってできたのだとする説もあります。しかし単純に、ひどい状況だったと理解した方がよいと思います。

父親は「何事かおできになるなら」と頼みます。新共同訳聖書だと「できるものならやってみな」というニュアンスになりますが、「何事か」がつくと、少し遠慮して言っているように聞こえます。しかし根底には父親の疑いが見て取れます。弟子たちの失敗を見て、父親はこう言ったのでしょうか。しかしそれは、中途半端な信仰なのです。

9:23 (しかし) イエスは (彼に) 言われた。「『(もし) できれば (るなら)』』と云うか。信じる者には何でもできる (すべてが可能だ)。」

イエス様は父親の「もしできるなら」という言葉に反応しません。その言葉には、父親が完全にイエス様を信じていない心があらわれています。

そしてその父親にイエス様は言われます。「信じる者にはすべてが可能だ」と。文字通りに受け取れば、信じる人はまるでスーパーマンのように何でもできるのだという意味にとることができます。からし種ほどの信仰で山が動くというのと、同じようなことです。

しかし原文をみると、「信じる者に対してはすべてが可能だ」と訳すこともできます。この場合の行為者は、神さま、またはイエス様に限定されます。信仰によって何でもできるようになるのではなく、信じる人に対して、神さま (あるいはイエス様) はどんなことでもできるということです。



つまり父親がイエス様を心から信じることで、神さまは顧みてくださるのです。その信仰をイエス様は父親に求めているのです。

9:24 (そして) その子の父親はすぐに叫んだ (で言った)。「信じます。信仰のないわたし (の不信仰) をお助けください。」

イエス様は以前、ヤイロや長い間出血の止まらない女性の信仰を認められました。そのような信仰を、果たしてわたしたちは持つことができるでしょうか。

この父親は、自分の不信仰を認めます。「わたしの不信仰をお助け下さい」という願いは、神さまが自分を信仰へと導いてくれるという確信のもとになされます。

信仰とは自分の力で得ることのできるものではないのです。自分の不信仰に気づき、求めることによってのみ、神さまから賜物として与えられるのです。わたしたちは何度となく、自分がどうしても神さまを悲しませてしまう現実に関心を痛めます。どうしたらしっかりとした信仰を持つことができるのだろうか、悩みます。

しかし、自分の力だけで信じる者になれるわけではないのです。神さまにより頼み、信じる者にされるのです。

9:25-26 (で、) イエスは、群衆が走り寄って来るのを見ると (て)、汚れた霊をお叱りになった (て言った)。「ものも言わせず、耳も聞こえさせない霊 (よ)、(この) わたしの (がお前に) 命令だ (する)。この子から出て行け。二度とこの子の中に入るな。」すると、霊は叫び声をあげ、ひどく引きつけさせて (引き裂いて) 出て行った。(そして) その子は死んだ (死人の) ようになったので、多くの者が、「(この子は) 死んでしまった」と言った。

マルコ福音書のいやしの多くは、イエス様がいやされる人を群衆の中から連れ出しておこなわれました。今回の場面、「連れ出して」という言葉は出てきませんが、一緒にいたはずの群衆が走り寄ってくるという記述から、いつの間にか群衆からイエス様たちは離れていたとも考えることができます。

イエス様は霊に、「このわたしがお前に命令する」と言われます。ここで「わたし」は強調されています。つまり「他ならぬわたしが言うんだぞ」という感じになるのです。イエス様の権威が強く描かれています。

しかし群衆の多くは、子どもは死んでしまったと勘違いしてしまいました。イエス様が「このわたしが」と言われたにもかかわらず、子どもの命は霊によって奪われてしまったのだと思ったのです。つまり、群衆の不信仰はそのままでした。

9:27 しかし、イエスが (その子の) 手を取って起こされると (た。) (すると彼は) 立ち上がった。

イエス様は子どもの手を取って起こされます。この「起きる」という動詞は、イエス様が復活するときにも用いられている語です。旧約聖書の中でも病気といやしは、死と復活に等しいのだと受け止められていました。当時の人々にとって、この物語は死者をよみがえらせるイエス様の力を連想させたのかもしれませんが。

9:28-29 (そして) イエス (彼) が家の中に入られると、(彼の) 弟子たちはひそかに (彼に)、「なぜ、わたしたちはあの霊を追い出せなかったのでしょうか」と尋ねた。
(そして) イエス (彼) は、「この種ものは、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」と言われた。

霊は追い出されました。しかし弟子たちは納得いかなかったでしょう。どうして自分たちには同じことができなかったのか。何が足りなかったのか。彼らは家の中でひそかに尋ねます。このような弟子たちの姿は、マルコ福音書に特徴的なものです。

イエス様は彼らに不足しているものを指摘します。それは祈りでした。しかしここで疑問が浮かびます。弟子たちは祈ることを知らなかったのでしょうか。確かにマルコ福音書では弟子たちは祈りを教わっていないし（主の祈りはマタイとルカにしかありません）、イエス様が祈る姿をまだ目撃していません。

祈りとは何でしょうか。それは神さまを信頼することです。弟子たちは霊を追い出すことができませんでした。それは自分の力だけに目を向け、自分に信頼を置いていたからなのかもしれません。そうではなく、神さまに視線を向け、すべてを委ねることが必要なのです。神さまの力により頼むことによって、道は開けていくのです。

<今日の箇所から>

弟子たちはイエス様がいない間に、その真似をしようとしてしましたが、失敗してしまいました。以前派遣されて多くの人をいやした時には、不安の中でいつもイエス様の助けを求めていたことでしょう。しかし今回の場面では、「イエス様がいなくても大丈夫、自分の力で何とかなる」と考えてしまったのかもしれません。

わたしたちも祈るとき、同じようなことを考えることはないでしょうか。「このようなことは神さまにお願いするべきではない」、「これくらいのことなら、神さまの力を借りなくても大丈夫」。その心は、弟子たちの今日の姿と重なるように思います。

また一方、信仰があるのに、祈っているのに、神さまが聞いてくれないと感じることもあられると思います。そのときのことを振り返ってみてください。祈りの答えをあらかじめ用意していませんか。その答え通りでなければ受け入れられないと、考えてはいないでしょうか。神さまに向かって祈りの答えを、わたしたちが設定することはできないのです。

イエス様はご自分に従うようにと促されます。しかしわたしたちは、自分の力だけでイエス様に従うことはできません。神さまから与えられる信仰という賜物に頼らなければ、わたしたちはイエス様に倣うことができないのです。

自分が不信仰であるということを受け入れていいのです。だからこそ、神さまに頼り、日々祈るのではないのでしょうか。そのような人を、神さまは用いてくださいます。そして告げられるのです。「その子をわたしのところに連れて来なさい」と。

今回の学びはこれで終わります。次回は1月26日(木)10時30分からです。「二度目の受難予告、誰が一番偉いのか」(マルコ9:30~37)について学んでいきます。